

ジョン万次郎の英会話

元祖英会話ともいえるジョン万次郎は『英米対話捷徑』(1859年、安政6年)という英会話の入門書を書いている。この本は早稲田大学の図書館などにあることが知られていたが、今ではファクシミリの復刻版が『ジョン万次郎の英会話』(Jリサーチ)として出版されて、誰でも簡単にみられるようになった。「捷徑」とは「早道」というほどの意味である。当時西洋のことばといえばオランダ語しか知らなかった日本人にとって、はじめての英会話入門書となり、万延元年に咸臨丸でアメリカに行った人たちもこの本で英会話を勉強したという歴史的な書物である。

『英米対話捷徑』では返り点やレ点を使って、英語を漢文の読み下しのように説明している。

You may say what you please.
 ユー マイ セイ フッチ ユー プリージ
 あなた ベシレ いうニ 何にても あなたの ころにあることをー

Good day, Sir.
 グーリ デイ シャー
 善き 日でござる。

How do you do, Sir.
 ハヲ ヅウ ユー ズー シャー
 いかが ごきげんレ あなたさま ようござるか

英語も漢文のように語順を入れ替えれば日本語に変換できると考えたのであろう。ジョン万次郎の翻訳は土佐弁訛りだが、かなり巧妙にできている。日本語にはない what を「何にても」とはよく訳したものである。Good day, Sir.の Sir は訳さないで、そこに含まれている相手への敬意の気持ちを「ござる」で表していることなども、かなりの工夫が感じられる。Good day, Sir.は「、、ござる」と訳して、How do you do, Sir.を「ござるか」と疑問形に訳したのは、語頭の How との関係を考えてのことであろう。

もし、日本語と英語、あるいは日本語と中国語が語順だけを入れ替えれば変換できるものであれば、英語の勉強もかなり楽だったと思うのだが、なかなかそうはいかないところに語学のむずかしさがある。

私が習った英語の教科書で、第一課は This is a pen.であった。これをジョン万次郎風に訳せば、このようになるのではなかろうか。

This is a pen.
 これ であるニ ひとつの ペンー。

日本の英語教科書は英語の原文だけあって、その発音や意味は教室で先生から教えてもらわなければならないから、大変である。

英語には単数と複数があって This (これ) は単数である。複数は These というのだということを、この段階でおしえるかどうかは別として、a pen (ペン) は単数であることは教えないわけにはいかないだろう。複数は pens というのだと教えることにして、is はどうだろう。is は be 動詞で I am, you are, he is, we are, you are、they are などになることも、やがて学ばなければならない。

ことばが情報を能率的に伝えるためにだけあるのであれば、I be, you be, he be で十分なはずである。しかし、言語は重構造(redundant)にできていて、主語で示した人称を動詞でも示すようになっていて、それによって、主語を聞きまちがえても、動詞の人称を聞けばそれが誰かが間違いなく伝わる構造になっている。

日本語では普通「ひとつのペン」などとはいわない。英語には冠詞というものがあって、a pen と the pen の使い分けは、いつまでたってもわからない。そのうちに、英語が嫌いになってしまう。イギリス人ならば pen には「家畜を入れる囲い」という意味もあることを知っているはずである。しかし、ペンと聞いて家畜の囲いを連想する日本人はいないだろう。ことばの意味は、そのことばの使われているシチュエーションによって決まる。日本人でも野球場のブルペンを知っている人は多いと思う。しかし、そのブルペンが「牛を飼うおり」の連想であることに気がつく人は少ないだろう。

英語ではペンのときは This is a pen. リンゴのときは This is an apple. といわなければならない。ことばは子音と母音の組み合わせによってできていて、This is a apple. などのように母音を重ねることを避ける傾向があるらしい。朝鮮語でも 나는(na neun・私は)・집은(jip eun・家は)、사과를(sa gwa reul・りんごを)・책을(chaek eul・本を)のように、前のことばが母音で終わることばの後には는(neun)、를(reul)のように子音で受ける。また、前の音が子音で終わることばの後では은(eun)、을(eul)のように母音で受けるというようなことがある。日本語でも観音(カン・ノン)、歎異抄(タン・ニ・ショウ)、天皇(テン・ノウ)などのようにリエゾンすることがある。This is an apple. も This is an napple. と発音したほうが英語らしい。

英語を母語として学ぶ赤ん坊は、一日中英語を浴びて育つから、This is a pen. と並行して、This is an apple. も These are pens. も These are apples. も何回となくくり返し接して、英語の仕組みをつかむことができる。

教室で英語を学ぶ学生は週に数時間の授業で、単数形と複数形から冠詞の使い方まで一度に学んで100点をとらないといけない。次の授業では動詞の単数形と複数形に進むことができないようなカリキュラムになっているから、辞書を引くぐらいしか自習のしようがない。

思うに、人はことばを学ぶときに、はじめて出会った単語や文法の半分ほどを記憶し、あ

との半分は、よほどの天才でない限り、二度目、三度目に会うことによって習得していくのではなかろうか。例えば、夏目漱石の『三四郎』を読んで感激したとする。一年後にまたそれを読むと、一回目には気がつかなかったことで、また感動する。

外国語の場合は、日本語という一つの言語体系を身に着けているから、それが異物の侵入を邪魔する。私ごとになるが、私も高校のころまでは英語は決して好きでもなく、得意でもなかった。

それが、大学に入って、田舎者の私は東京神田の三省堂を覗いたら洋書というものがあつた。それまでは受験勉強のために南雲堂などのレプリントしか見たことがなかった。そこで、蛮勇をふるって Somerset Maugham の "Of Human Bondage" という受験英語でもなじみの本を買うことにした。はじめは辞書を引ながら読んでいたが、大部の本で、いちいち辞書をひいていたら、いつ読み終わるか分からないので、辞書を引くのをやめた。50点積み重ね方式で、はじめは半知半解だったが、読み進むうちに、だんだん英語への恐怖心が消えて、話が分かるようになってきた。

『ジョン万次郎の英会話』はどうだろう。

I am sorry to hear that
アイ アム ソレ ツ ヘア ザヤタ
わたくしは きのだくにおもふレ ことをレ きくニ その
your Grandfather is sick.
ユーア グランダフワザ イジ セッキ
あなたが 祖父 (ぢぢさま) あるとーレ やまひで
Is your Father any thing better than
イジ ユーア フワザ エネ センキ ベタ ザン
ありや五 あなたの ててごは いささか三 ころよく四 よりも二
he was this morning?
ヒー ウワーシ ゼシ モーネン
かれの すぎし 今 (この) 朝 (あさ)
No, I think he is rather worse.
ノー アイ センカ ヒー イジ ラザ ウワーシ
否 (さふでない) わたくし おもふに かれ あるニ すこしづつ あしきかたでー

同じことばが何回も繰り返しててくれば、少しづつ蓄積することができる。ことばの意味は単語によってきまるのではなく、単語の使われ方によって決まる、と主張する言語学者もいる。単語にはいくつも意味があることがある。赤ん坊は実際の生活の場でことばを学んでいるから、意味を取り違えることはない。しかし、江戸時代の日本人なら「pen というのは筆のごとき物でござるか？」と聞いたであろう。

それにしても、これで英会話を習った咸臨丸の乗組員もある程度英語が通じたのであろうから、現在は辞書もあり、音声教材も豊富にあるなかで英語を習っている我々は、学校の

英語のテストのことは忘れて、日本式発音でも自信をもって英語を使ってみてもいいのではなかろうか。

ジョン万次郎は morning を「モーネン」としているが、anything は「エネセンキ」であり、I think は「アイ センカ」である。英語の-ng は日本語ではカ行にもナ行にもなる。このほうが、かえって原音に近いのかもしれない。『英米対話捷徑』には、ほかにも次のような例がある。

Are you coming?
アー ユー カメン
あるかニ あなた 来られるのでー
I am going
アイ アム ゴイン
わたくし こと 行くところなり

学校英語では Are you coming? に対しては Yes, I am coming. というのが正しいと教わる。英語では聞き手の立場からみて「向かってくるとき」は going ではなく、coming というのだ、という。しかし、ここではそんなことは気にしない。

日本語では最近カ行濁音の [g] と鼻濁音の [ng-] の違いが失われつつあるという。標準日本語では語頭では [ga] となり語中では [nga] と発音するのが正しいとされていた。かつては音楽学校を [on-ngaku gakkou] と発音できなければ NHK のアナウンサーは採用されなかった。しかし、東京方言では [nga] が失われて [ga] になってしまった。音楽学校は [on-gaku gakkou] になり、それが全国的にひろがって、今や鼻濁音が発音できる人は東北出身の人だけになってしまった。

昔、横浜の居留地で外国人は「犬」のことを「亀」というという話があったという。異人さんが犬を呼ぶのに “Come on! Come on!” といっているのを聞いた人が「カメ、カメ」と聞いて「犬」は英語で「亀」というのだ、と思ったというのである。

『英米対話捷徑』でもうひとつ気になるのは、Good day, Sir. の「グーリ デイ シャー」である。「シャー」は万次郎の出身地、高知の方言だとしても、Good (グーリ) は気になる。誤植ではないかと思い、ほかの例を調べてみると bed (ベーリ)、bad (ヘーリ)、hard (ハーリ) などの例があることが分かった。t、d、l は調音の位置が同じ（歯茎の裏）であり、音価も近く、転移しやすい。日本語は音節が母音で終わる開音節だから、日本式発音では goodo, beddo, baddo, haado などとなる。学校では d を落とすと英語の試験では満点がもらえない。ジョン万次郎はどうであろうか。

- リに転移した例：good (グーリ)、bad (ヘーリ)、bed (ベーリ)、hard (ハーリ)、
- 両方ある例：and (アン・アンド)、but (ハッ・バツタ)、must (マスー・マスト)、
- 脱落した例：cold (コール)、changed (チャインジ)、dead (ダイ)、eight (エイ)、hold (ホール)、hundred (ハンヅレ)、night (ナイ)、thousand (サウシン)、

これらの表記は聞き間違いと見るよりも、むしろ聴覚に忠実に移したと見る方が正しいのではあるか。

It is a moon light night.を「イータ イシ エイ ムーン ライト ナイ」としているのも理解できる。これを日本式に Itto izu a muun raito nanito と発音したのとしたら、ジョン万次郎の英語よりよく通じるとは限らないのではなかろうか。

ジョン万次郎の英会話では田崎先生にしかられるかもしれない。しかし、私はジョン万次郎の英会話からも学ぶべきものがある、と思う。私流英会話の要諦は3つある。

1. ジャパニース・イングリッシュを恥ずかしがらずに堂々と使う。

私がいたニューヨーク市では大学の教授の三分の一がユダヤ系だから、ユダヤ教の祝日には教授の三分の一は出てこないだろうと思ひ、学生は講義にでてこない。教授の方は学生がほとんどでてこないだろうと思ひ、講義に出てこない。

ニューヨーク市民の三分の一は三代前（祖父母の代）まで遡れば移民だという。だから、移民の英語に寛大である。家庭内ではイタリアン・アクセントやジューイッシュ・アクセントが入り混じっている。ジャパニーズ・イングリッシュも何も肩身の狭い思いをすることはしない。

Bat（野球のバット、あるいはコウモリ）、でも but（しかし）でも、bad（悪い）、bud（芽）でも使われるシチュエーションが違うから、相手は分かってくれる。ただ、batto のように母音をつけて発音しないように気をつけたほうがいい。

2. 複合母音を覚えたほうがいい。

日本語の音節はC（子音）+ V（母音）であるが、英語には複合母音がある。それに対して英語には複合子音がある。black, blind, blond, blood, bride, brown, はいずれも一音節である。それを「ブラック」「ブラインド」「ブロンド」などのように4音節、5音節で発音していたのでは、なかなか分かってもらえないことがある。school, sky, slow, smile, snow, speed, spoon, split, spring, square, star, stop, strike, street, sweet はいずれも英語では一音節である。

英語はアルファベット26文字で、すべてのことばを表記することができるが、英語には3000を越える音節があるという。もし、英語を中国語の漢字のように音節文字で表そうとしたら3000以上の文字が必要だということになる。日本語が五十音（五十音節）で書けるのと比べると、英語の音節はかなり複雑である。

3. 英語にも多音節の単語もある。

英語にも多音節の単語はある。sprin-kler, spec-tro-scope, ster-e-o-type などである。辞書を引くと音節の分かれ目に(-)などがあり。音節の分かれ目が表示されているので、音節の分かれ目を無視しないことである。

英語には多音節の単語は少ないので、E-li-za-beth、chry-san-the-mum（菊）などということばは不得意である。だから、E-li-za-bethの通称はBet-tyになったりする。日本で出版された本では「エ・リ・ザ・ベ・ス」とか「ク・リ・サン・セ・ナム」のように日本語の音節

のように行替えしていることがあるが、アメリカやイギリスで出版された本では、必ず音節の切れ目で行替えが行われている。英語でも日本語でも、ことばの意味は音素に結びついて
いるのではなく、音節に従っているのである。

日本語と英語はどのような違いがあるのだろうか。

[日本語]

[英語]

【統語】

- 主語＋目的語＋動詞 ●
- 名詞＋助詞で糊付けしていく（膠着語） ●
- 形容詞＋名詞 ○
- 前置詞をつかわない ●
- 疑問文は疑問詞を文末におく ●
- 否定形は動詞の後にくる ●

【形態】

- 冠詞を使わない。 ●
- 文法上の性がない ●
- 単数・複数の区別がない ●
- 格変化がない ●

【音韻】

- 開音節（母音で終わる） ●
- l と r の区別がない ●
- l で始まることばがない。 ●
- （古代日本語では）語頭に濁音がこない ●
- 複合子音（子音を重ねる）ことがない ●

日本語と英語ではほとんど共通の文法法則がない。

次回は上古日本語